The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	明末における『捜神記』出版について : 当時の知識人の小説評価にむけて
Author(s)	大村, 由紀子
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 1998, 32, p. 43-55
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47951
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

明末における『搜神記』出版について

――当時の知識人の小説評価にむけて――

大村由紀子

はじめに

東晋・干宝撰『搜神記』は、六朝志怪小説を代表する作品の一つである。六朝志怪小説の多くは散佚しており、『搜神記』もその例外ではなく、趙宋には散佚したと言われている。ところが、明代に至って、『搜神記』の輯佚・編纂作業が行われ、いわゆる「二十巻本」（『秘冊彙函』所収本など）・「八巻本」（『広漢魏叢書』所収本など）・「道蔵本」などのテキストが陸続と刊行されるようになる。これらのうち、善本として信頼がおけるものは、「二十巻本」であるとされている。

志怪小説に対する評価として、『論語』述而篇に「子　怪力乱神を語らず」とあるように、中国においては「怪異を志した」志怪小説は、文学ジャンルの中でも低い位置にあるとされてきた。しかし、明代に『搜神記』を輯佚・刊行をした人々の中には、当時の文学者としては一流の知識人たちも含まれていたのである。『搜神記』に関

する従来の研究は、二十巻本『搜神記』をほぼ干宝の原書と見なした上で、干宝の思想や六朝時代における志怪小説の位置などを論じたものが主であり、ややもすると、『搜神記』が、明代に編纂されたという事実は、看過されがちであった。そこで本稿は『搜神記』の内容そのものを論じるよりは、明代に至って『搜神記』が輯佚されたことに注目し、二十巻本『搜神記』の編纂・刊行の状況及び意図を明らかにした上で、明代に志怪小説がどのように受け取られてきたのか考える出発点としたい。

一、二十巻本『搜神記』の成立

『四庫提要』の子部・小説家類三は、『搜神記』の成立をめぐって次のように述べる。

此の本（二十巻本『搜神記』）　胡震亨『秘冊彙函』の刻する所為（た）り。後に其の版を以て毛晋に帰し、『津逮秘書』に編入せし者なり。

この記事によって、二十巻本『搜神記』が明の胡震亨の編纂した『秘冊彙函』に収められ、後にその版木が『津逮秘書』に収録されたことが分かる。ちなみに、二十巻本『搜神記』を研究する際、底本とするのは普通、清の張海鵬編『学津討原』であり、これは『津逮秘書』を基にしている。『四庫提要』の記事は、末尾に胡応麟『甲乙剰言』の言葉を引いて次のように述べる。

胡応麟『甲乙剰言』に曰く、「姚叔祥（叔祥は姚士粦の字）　余（胡応麟）の家蔵の書目に干宝『搜神記』有

るを見、大いに駭きて曰く、〈果たして是の書有りや〉と。余　之に応じて曰く〈此れ『法苑〔珠林〕』・『〔太平〕御覽』・『芸文〔類聚〕』・『初学〔記〕』・『〔北堂〕書鈔』諸書中従り録出するに過ぎざるのみ。豈に金函・石匱・幽巖・土窟従り掘り得たらんや。大抵後出の異書、皆な此の類なり〉と。」斯の言允なり。

これにより、次の二つのことが分かる。一つに、明末の文人胡応麟の蔵書目録に干宝『搜神記』があり、それを見た友人の姚士粦が大いに駭いたということ。もう一つは、この胡応麟所蔵の『搜神記』は、『法苑珠林』・『太平御覽』・『芸文類聚』・『初学記』・『北堂書鈔』などの類書に残存する『搜神記』の佚文を輯めて成立したということである。さて、『秘冊彙函』は、干宝『搜神記』をはじめ、漢代から宋代までの書物が二十二種収められた叢書である。その序文を見ると、「万暦癸卯八月一日　繡水沈士龍汝納・武原胡震亨孝轅同題」とあり、万暦癸卯（万暦三十一年・一六〇三年）に、沈士龍と胡震亨との手で一応の成立を見たと考えてよいだろう。そして更に注目されるのは『秘冊彙函』の編纂には、姚士粦も加わっていたことである。このことは『明詩人小伝稿』巻五・姚士粦伝に次のようにある。

〔姚〕士粦　字は叔祥、海塩の人。国子生にして、才学奥博なり。秦漢以来の遺文秘簡を蒐討し、『秘冊彙函』の若干巻を撰す。

右の記事には、姚士粦が『秘冊彙函』に収められている幾つかの書物の編纂に、携わったことが記されている。その具体例としては、『秘冊彙函』所収『於陵子』の序文などより窺うことができる。以上『四庫提要』の引く胡

応麟『甲乙剰言』及び、『秘冊彙函』の編纂に姚士粦が参加していた事実より、従来『搜神記』の編纂・刊行の過程は次のように考えられていた。まず、胡応麟が類書等からの輯佚作業を通して『搜神記』を編纂し、それを実見した姚士粦が、胡応麟所蔵『搜神記』を手に入れて、同郷の友人胡震亨と共に、『秘冊彙函』に収め刊行したのである、と。このような『搜神記』の編纂をめぐって、小南一郎「干宝『搜神記』の編纂（下）」（『東方学報（京都）』第七〇冊・一九九八年）は、次のような見解を示す。

明代における二十巻本「搜神記」の出現について、現存の資料を組み合わせて、もっとも簡単な形での由来説明を付ければ、次のようになるだろう。すなわち、胡応麟のもとにあった輯本の「搜神記」が姚士粦と胡震亨とのもとにもたらされ、それが「秘冊彙函」などの叢書に収められて、出版されたのだと考えるのである。しかしそうであるならば、二十巻本の序文などに、このテキストが胡応麟から出たものだという言及があってもよさそうなのに、それがない。

もしここで想像を逞しくすることが許されるならば、次のように考えてみたいと思う。すなわち、胡応麟の手もとにあった「搜神記」のテキストを姚士粦と胡震亨は、使用することができなかった。わざわざ書目で見たと云っているのは、実物をちゃんと見せてもらえなかったからだと考えられよう。姚士粦が「搜神記」を見たいと求めたとき、胡応麟は「書物に詳しい方にはお示ししたくない（不敢以詒知者）」と云ったと、「見只編」巻中にある。しかし彼ら二人には、「搜神記」を出版したいという強い気持ちがあった。彼らが「搜神記」に執着したのは、二人の郷里である海塩（浙江省）の地が、第二章の最初にも見たように、そこに干宝の父の墓

があるとの伝説があって、干氏一族と関係薄からぬ土地であったことと関わっていた。郷里の先賢だとされる干宝の「搜神記」をどうしても自分たちの手で出版したいと願ったのである。そこで、やむを得ず、この二人の身辺で、胡応麟のテキストとは別に、類書などを用いて、「搜神記」復元の作業が行われた。（中略）このようにして復元された「搜神記」は、通行の「晋書」干宝伝の記事を参考にして、二十巻本に仕立てられ、「秘冊彙函」に収められて出版された。その同じテキストが、ほどなく、「塩邑志林」（天啓三年序）にも収められ、二巻本として出版された。なぜ二巻本に仕立て直されたのかは分からない。単に叢書を収めるための都合によったに過ぎないのかも知れない。ちなみに、この「塩邑志林」は、姚士粦と胡震亨との故郷である、海塩の地と関わりを持つ先賢たちの著作を集めた叢書であって、干宝もその先賢の一人として、「搜神記」と「干宝易解」とが、その中に採られているのである。

小南氏の見解は次の二点に要約される。一つは、姚士粦・胡震亨が、独自に二十巻本『搜神記』を編纂した、つまり二十巻本『搜神記』は、胡応麟の所蔵していたテキストではないということである。そしてもう一つは、姚士粦・胡震亨の『搜神記』刊行の契機として、干宝が彼ら二人の郷里、浙江省海塩県の先賢であった事実が深く関わっていることである。

小南氏の論ずる一点目、姚士粦・胡震亨の手による『搜神記』編纂については、「もしここで想像を逞しくすることが許されるならば」と断っているものの、若干疑問が残る。「姚叔祥　余の家蔵の書目に干宝『搜神記』有るを見、大いに駭きて曰く、云々」という記事だけでは、姚士粦が胡応麟所蔵の『搜神記』を実見したのか、そうで

ないのかは判断し難い。むしろ蔵書目録に有るのを見たのだから、尚のこと現物を目にしているとも考えられるのである。小南氏がすでに前掲論考において指摘するところであるが、胡応麟は志怪小説に興味を抱いており、「異」の字を標題とする志怪小説を輯佚して、『百家異苑』を編纂している。それ以外にも胡応麟は『少室山房筆叢』九流緒論下において、〈小説〉のジャンルを六つに分類して論じているが、その第一番目に〈志怪〉の項目をたて、その代表として『搜神記』の名を挙げているのである。

以上のように、胡応麟が志怪小説に関心があったことを踏まえ、『甲乙剰言』の記事から見ても、胡応麟自身が『搜神記』を輯佚した可能性は排除できない。とはいえ、姚士粦は胡応麟所蔵の『搜神記』を実見し得たのかどうかについては、小南氏の推測も否定できず、『甲乙剰言』で胡応麟の言う『搜神記』は即ち現行の二十巻本『搜神記』なのか、という問題も根本にはあるのだが、その由来について明確なことはよく分からず、目下のところ判断に苦しむ。次に小南氏が論ずる二点目、『搜神記』の「復元作業を行った背景には、干宝を海塩県の地の先賢だとする、郷土意識が働いていた」という点について、章を改めて論ずる。

二、『搜神記』の撰者干宝と浙江省海塩県の郷紳

前章で述べたように、小南氏は「郷里の先賢だとされる干宝の『搜神記』をどうしても自分たちの手で出版したい」という、浙江省海塩県の文人たちの熱意によって二十巻本『搜神記』が出版された、と述べる。現在通行する二十巻本『搜神記』は、胡震亨編『秘冊彙函』（以下、『秘冊彙函』本と略称）に収められる形が、もっとも古いものである。その『秘冊彙函』の序文が記された万暦三十一年（一六〇三年）より二十年後の、天啓三年（一六二三

年）序を冠する『塩邑志林』に、『秘冊彙函』本『搜神記』と同じテキストが、二巻本（以下『塩邑志林』本と略称）の形で収められている。この事実を基に、小南氏は、胡震亨・姚士粦の『搜神記』出版には郷土意識が関わっている、と指摘したのである。筆者は、この『塩邑志林』本に関しては小南氏の論ずる通りであると考える。

胡震亨と姚士粦とは、『秘冊彙函』・『塩邑志林』といった叢書の編纂・刊行を盛んに行っていたが、それ以外にも、当時の知県であった樊維城の監修の下、浙江省海塩県の地方志、天啓『海塩県図経』（天啓甲子〈天啓四年・一六二四年〉序）を編纂している。この中に干宝に関する記事が幾つか見られ、それによれば、胡震亨らが干宝に強い関心を抱いていたことが分かる。例えば次のような記事がある。

郷賢〔祠〕には　干宝・顧況（中略）鄭履準・許聞を祀る。二祠（名宦祠・郷賢祠）に至りては、皆な学宮に在りて文廟の左右に列せらる。

（『海塩県図経』方域篇第一之二・六之県職署・秩祠）

右の記事により、干宝が海塩県の学校の郷賢祠に祀られていたことが分かる。また、『海塩県図経』巻二の末には、海塩県の学校における廟の位置が図で示されている。ところで、『晋書』干宝伝は「〔河南省〕新蔡〔県〕の人」と、その出身を記しており、これを見る限り、干宝は海塩県とは何ら関係の無いように思われる。しかし胡震亨は、『海塩県図経』巻十二人物伝において次のように述べる。

震亨按ずるに、徐泰『〔海塩県〕志』に云う、「『晋史』に〈〔干〕宝は新蔡の人なり〉と。『一統志』に〈宝は新蔡自り〔浙江省〕嘉興〔県〕に徙り、父〔干〕瑩は海塩に葬らる〉と。『五行記』に〈宝は海塩の人為り〉

と載すれば、則ち南に居を徙すは、実に瑩自り始まりて、宝は固より海塩の人たること疑い無きなり」と。〔徐〕泰の援引する所　此くの如し。今再考するに、釈道宜『続高僧〔伝〕』慧因伝の内、後裔の名秩並びに籍海塩に繋がるを附載す。此の書　唐人の撰する所なれば、古を去ること遠からず、尤も宝の〔海〕塩人為るの確証ならん。徐〔泰〕の『志』の未だ備わらざる所を補うべしとしか云う。

胡震亨は、まず徐泰『海塩県志』の中の、干宝が海塩県の人であることを示す記事を引用し、その上で『続高僧伝』慧因伝の中に、干宝の後裔の官位とその戸籍が海塩に属することが記されている、と述べる。このように胡震亨は重ねて、干宝が海塩県の人であることを強調しており、いかに胡震亨が郷土の先賢干宝に対して関心を払っていたか窺えるのである。またこの他にも、『海塩県図経』巻三・方域篇第一之三・七之県名勝譜に、干宝の父の墓が、県の西南四十里にあるという記事が見られる。同巻十六・雑識篇第七には、干宝の兄が蘇生した話も見える。筆者の実見の限りでは、『海塩県図経』において、他の先賢と比べても、干宝とその一族に関する記事は決して少なくないと言ってよい。胡震亨をはじめとする浙江省海塩県の郷紳らの、干宝に対する関心の深さが窺えるところである。

以上『海塩県図経』の記事を挙げ、小南論考が指摘するように、干宝をはじめとする干氏一族は浙江省海塩県と非常に縁が深かったことを述べた。特に、干宝が海塩県の学校の郷賢祠に祀られていたという、『海塩県図経』の記事により、胡震亨をはじめ当時の海塩県の郷紳らには、干宝を郷土の先賢として敬う思いがあったことが分かるのである。

天啓『海塩県図経』が、当時の知県であった樊維城の監修の下、胡震亨・姚士粦によって編纂された地方志であることは、先にも述べた。そして、二巻本『捜神記』を収める『塩邑志林』もまた、樊維城の監修の下、胡震亨・姚士粦を中心とした、海塩県の郷紳たちの筆記を集めた叢書、といった性格を帯びている。また、『海塩県図経』には、天啓三年（一六二三年）の序、『塩邑志林』には天啓四年（一六二四年）の序が附されていることからすれば、両者の成立時期はほぼ同じであり、その上、両者とも知県の樊維城が監修していることからすれば、両者には何らかの共通した刊行意図があったと推察されよう。

浙江省海塩県は、明末に初めて、それまでの里甲制より均田制への移行が進められた県である。その際に、郷紳たちは均田制による不利益を恐れ、妨害を幾度となく起こし、知県がその解決に心を砕いたことは、濱島敦俊『明代江南農村社会の研究』（東京大学出版会・一九八二年）に詳しい。濱島論考によれば、天啓『海塩県図経』とは、「自らも天啓元年の均田均役を実施した知県樊維城が郷紳（万暦二十五年挙人）胡震亨に編纂させたものであり、〈乾隆『海塩県続図経』巻六、人物、胡震亨の条〉、均田均役の実施を推進する意図に基づいて刊行された」という地方志である。濱島論考は、海塩県の郷紳に対する知県樊維城の懐柔について、直接は言及しないものの、同論考により、次のように考えたい。天啓年間に『海塩県図経』・『塩邑志林』と、海塩県に関する叢書を刊行させたのは、知県として郷紳らを慰撫する目的があり、そうすることで均田均役をはじめとする樊維城の政策に支障をもたらすことを防いだのではないだろうか、と。『海塩県図経』と『塩邑志林』との間には、このような共通する刊行意図があったと考えられるのである。

いずれにせよ、『海塩県図経』に干宝に関する記事が多く見られたり、『塩邑志林』に二巻本『捜神記』が収めら

れているのは、海塩県の郷紳たちが郷土の先賢として干宝を尊敬する念より生じたと言えよう。以上天啓『海塩県図経』より、干宝に関する記事を幾つか挙げた。これらの記事によって、小南論考がすでに指摘するように、干宝は浙江省海塩県と縁の深い人物であり、胡震亨らが『搜神記』の刊行に至った背景には、同郷の先賢である干宝に対する尊敬の念が働いていたことが分かる。

確かに『塩邑志林』本『搜神記』に関しては、小南氏の説は正しいと言えよう。しかし、『秘冊彙函』所収『搜神記』についても、『塩邑志林』本同様「郷土意識」の所産と言えるであろうか。無論『秘冊彙函』も『塩邑志林』と同じく、胡震亨によって編纂されており、『秘冊彙函』の編纂の時点でも、胡震亨は干宝を海塩県の先賢とする認識はあったであろう。ただし、『秘冊彙函』と『塩邑志林』との成立の間には、凡そ二十年の隔たりがあり、基本的に両者は、その編纂方針を含めて同一視できないということは、多言を要しない。小南論考はその二十年の年月の差を意識していないように思われる。『秘冊彙函』には、単なる郷土意識では掬いきれない、明人の当時の小説観を考える上で重要な手がかりがひそんでいる。この点については、次章において言及したい。

三、『秘冊彙函』に関わる知識人

清末民国初の葉徳輝『書林清話』巻七・明毛晋汲古閣刻書七は、『秘冊彙函』について次のように述べる。

> 按ずるに、『秘冊彙函』其の未だ『津逮秘書』に帰并せらるるを経ざる以前、印本の伝布頗る稀なり。吾れ曾て蔵して多種有り。『歳華紀麗』・『瑯環記』実に其の内に有れば、則ち其の収むる所蕪雑なり。

葉徳輝が「蕪雑」と評するように、『秘冊彙函』に収められている書物は統一性を欠いており、その明確な編纂方針は見出しにくい。例えば、漢・趙爽注『周髀算経』という天文算法の書物があれば、唐・李鼎祚『易解』という易の注釈書もあるといった具合であり、また、宋・孟元老『東京夢華録』といった、汴京の風俗を記した地理書などもおさめている。このように、『秘冊彙函』に収められている書物は、その種類に富んでおり、『秘冊彙函』自体の編纂目的は、海塩県と直接の関係はなさそうである。

さて、胡震亨の活躍した明末の時代は、出版の盛んな時代であり、その中でもとりわけ浙江省は当時の出版における中心地であった。そして、葉昌熾『蔵書紀事詩』や葉徳輝『書林清話』が言及するように、胡震亨はその浙江省における蔵書家として有名な人物の一人だったのである。当時は蔵書家たちが自らの所蔵する秘本を盛んに刊行していたが、『秘冊彙函』にもそのような編纂姿勢が窺えるといってよい。『秘冊彙函』序は次のように言う。

僕輩　墳典を好むこと頗る蘭の如きに叶えり。乃ち王充の〔ごとく〕肆を閲しては典質を恡(お)しむこと無し。班嗣の〔ごとき〕本を乞えば屢々譏答に逢うに至る。癖　誠に之れ有りて、聚むるは亦た富めり。（中略）書応に四部に分かつべくも、本少なければ、未だ倫別を須いず、略(ほ)ぼ撰人の年代を以て次と為すのみ。

右の記事の「王充の〔ごとく〕肆を閲しては」というのは、王充の若かりし時、家が貧しかったために洛陽の書肆の書を暗誦し、百家の言に通じるようになった、という『後漢書』王充伝の記事による。また、「班嗣の〔ごとき〕本を乞えば」というのは、『漢書』班嗣伝に、桓譚が班嗣の蔵書を借りようとしたところ、班嗣が強く断ったという話があり、これに基づく。この『秘冊彙函』の序文により、胡震亨ら『秘冊彙函』の編纂者が、書物を蒐

集する癖があり、それが昂じて自らの蔵書をまとめて『秘冊彙函』を刊行するに至ったことが分かる。

さて次に、『秘冊彙函』の編纂者たる胡震亨の当時における文学的志向について考えてみたい。第一章ですでに述べたように、『秘冊彙函』の編纂者の一人である姚士粦は、明末の文人胡応麟と深い交友関係にあった。また、『秘冊彙函』所収『霊宝真霊位業図』には、王世貞の序文が附されている。この王世貞と胡応麟とは、明末の文人集団である古文辞派に属していた。このように『秘冊彙函』の編纂者である胡震亨・姚士粦は、王世貞・胡応麟ら古文辞派と何らかの繋がりがあったと考えてよいだろう。古文辞派が文学ジャンルの中でも尊ぶのは、王世貞の持論「文は必ず西漢、詩は必ず盛唐」（『明史』王世貞伝）が示すように、時代の古い散文・詩文に傾くものである。そして胡震亨自身も、『全唐詩』の藍本となった『唐音統籤』をはじめ、李白・杜甫の詩の注釈書である『李詩通』・『杜詩通』などを編纂している。このように、胡震亨は唐代の詩集の刊行にかなりの力を入れており、唐代の文学に深い関心があった。以上の点をまとめると、『秘冊彙函』の編纂者である胡震亨らは明末の古文辞派と交流があり、また彼らの文学的志向の中心を占めるのは詩であって、とりわけ唐代の詩に傾倒していたと言えよう。

中国文学においては「小説」を論ずる際、「詩文」は〈雅〉であり、「小説」は〈俗〉であるとして、扱われてきた。つまり、「小説」に関わることは、民国以前の中国においては、知識人の鄙事とされてきたのである。

ところが、第一章にも触れたように、古文辞派に属する胡応麟は古小説を五つのジャンルに分けて論じ、古小説に関心を払っていた。また、唐代の詩に傾倒していた胡震亨は、『搜神記』・『搜神後記』・『異苑』といった六朝志怪小説を収める『秘冊彙函』の編纂・刊行を行っていた。彼らは〈雅〉なる「詩文」を尊んでいる一方で、〈俗〉なる「小説」に関心を払っており、一見すると彼らの文学的志向は、全く矛盾しているように思われる。で

は、「詩文」をその文学志向の中心としていた胡応麟や胡震亨にとって、六朝志怪小説はどのような位置にあるのだろうか。本稿では、二十巻本『搜神記』の編纂・刊行の状況及び意図について考察したが、少なくとも胡応麟や胡震亨は、『搜神記』をはじめとする文言小説を決して軽視していたのではない。彼らにとって文言小説は軽んじる対象ではなく、ある程度評価していたと考えられるのである。胡震亨や胡応麟の著作全体から、「詩」や「小説」に対する彼らの評価を考察し、その上で「詩文」と「小説」と、といった単純な対立ではない、中国の知識人の文学観をもう一度見直す手がかりとしたいが、それについては今後の課題とするところである。

おわりに

以上、第一・二章において、明末における二十巻本『搜神記』の出版には、胡震亨ら知識人が関わっていたこと、そして、彼らは浙江省海塩県の郷紳であって、同郷の先賢である干宝に対する尊敬の念から『搜神記』の出版に至ったことを述べた。第三章においては、古文辞派に属する胡応麟や唐代の詩に傾倒する胡震亨が、『搜神記』をはじめとする、文言小説にある程度の評価を与えていたことについて言及した。

さて明末にあって、復古を唱える古文辞派は、袁宏道ら袁氏三兄弟を中心とする公安派と、その文学志向の違いにより、対立していた。袁宏道ら公安派は『金瓶梅』などの白話小説を評価しており、それに対し古文辞派に属する胡応麟らは文言小説を評価していた。胡応麟が古小説を五つのジャンルに分けて評価したこと、及び胡震亨が『搜神記』を刊行するに至った背景には、当時における文人集団の文学観の対立も関わっていたのではないかと筆者は考えている。こうした点も踏まえて、今後も明末における文言小説の出版活動を考察していきたい。

（大学院後期課程学生）